豊　前　国　府

昭和61年度発掘調査概報

豊津町文化財調査報告書
第 5 集

1 9 8 7

豊 津 町 教 育 委 員 会

豊　前　国　府

昭和61年度発掘調査概報

1 9 8 7

豊 津 町 教 育 委 員 会

序

豊津町教育委員会では、近い将来に豊前国府推定地である惣社・国作地区に圃場整備事業が及んでくるのを一つの契機として、福岡県教育委員会文化課の指導を得て、昭和59年度から３ヶ年の計画で発掘調査を実施してきました。

本年度はその最終年度を迎えることになり、今回は未調査であった国府推定域の南辺部にあたる地域の調査を主として行いました。本書はその概要をまとめたもので、広くご活用いただければ幸いであります。

本書を刊行するにあたりまして、調査に御協力いただきました地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和62年３月31日

豊津町教育委員会

教育長　吉　田　無佐治

例　　言

1.　本書は豊津町教育委員会が国・県の補助金を受けて昭和61年度に実施した豊前国府推定地の発掘調査概要の報告である。

なお、本書では既往の調査として、福岡県教育委員会文化課によって実施された「宮ノ下線道路拡幅工事に伴う調査」（昭和56年）と「県道椎田・勝山線工事に伴う調査（幸木地区）」（昭和53年）の緊急調査の結果についても、国府関連の調査として貴重であるので、ここで報告することとした。

2.　この発掘調査は県営京築地区農村基盤総合整備パイロット事業に伴う遺構確認調査で、3ヶ年計画で行うものである。本年度は第3年次にあたる。

3.　検出遺構については豊前国府跡発掘調査指導委員の指導を受けた。

4.　遺構実測図は国土調査法第II座標系を基に推定地内に基準点を設け、これを基準にして作製した。(『豊前国府』—昭和59年度発掘調査概報—「豊津町文化財調査報告書」第3集　1985参照)

5.　掲載の写真は遺構については末永弥義が、また遺物については九州歴史資料館学芸一課の石丸洋が撮影した。

6.　本書の執筆・編集は石松好雄と横田賢次郎が主体となり、九州歴史資料館調査課の倉住靖彦・高倉洋彰・森田勉・赤司善彦の協力を得、遺物の整理については田崎道子・大田千賀子・小西恵子の助力を得た。

また、「宮ノ下線道路拡幅工事に伴う調査」と「県道椎田・勝山線工事に伴う調査」については福岡県教育委員会の井上裕弘と筑豊教育事務所の新原正典の調査によるもので、その遺物整理については岩瀬正信の協力を得た。

さらに、豊津町文化財保護委員の大八木信之氏には所有の資料を参考にさせて頂いた。記して謝意を表したい。

目　　次

序
Ⅰ．調　査　計　画……1
Ⅱ．調　査　経　過……3
Ⅲ．遺　　構……6
㈠　本年度の調査……6
1．馬　場　地　区……6
2．ロ ヶ 坪 地 区……6
3．中 小 路 地 区……7
4．宮 ノ 下 地 区……8
5．古　門　地　区……9
㈡　既 往 の 調 査……9
1．宮ノ下線道路拡幅工事に伴う調査……9
2．県道椎田・勝山線建設工事に伴う調査……9
Ⅳ．遺　　物……11
㈠　本年度調査出土遺物……11
1．馬場地区出土土器・瓦……11
2．中小路地区出土土器……13
3．ロヶ坪地区出土木製品……13
4．古門地区出土陶磁器……13
㈡　既往の調査出土遺物……13
1．宮ノ下線関係出土土器・陶磁器・石製品……13
2．県道椎田・勝山線関係出土土器・陶磁器……16
Ⅴ．結　　語……20

挿　図　目　次

第１図　豊前国府推定地周辺図……2
第２図　国作地区トレンチ配置図……4
第３図　馬場地区遺構配置図……6
第４図　ロヶ坪地区遺構配置図……7
第５図　中小路地区遺構配置図（Ｃトレンチ）……8
第６図　中小路地区遺構配置図（Ｇトレンチ）……8
第７図　宮ノ下地区遺構配置図（Ｄトレンチ）……8
第８図　宮ノ下地区遺構配置図（Ｆトレンチ）……8
第９図　古門地区遺構配置図……9
第10図　宮ノ下線関係遺構配置図……10
第11図　県道椎田・勝山線関係遺構配置図（西区）……10
第12図　県道椎田・勝山線関係遺構配置図（東区）……11
第13図　馬場・中小路地区出土土器実測図……12
第14図　馬場地区出土瓦実測図・拓影……12
第15図　ロヶ坪地区出土木製品実測図……13
第16図　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器実測図（１）……14
第17図　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器実測図（２）……15
第18図　宮ノ下線関係出土土器実測図（３）……16
第19図　宮ノ下線関係出土土器・石製品実測図（４）……17
第20図　県道椎田・勝山線関係出土土器・土製品実測図（西区）……18
第21図　県道椎田・勝山線関係出土土器・陶磁器実測図（東区）……19

図　版　目　次

図版１　（上）　馬場地区遠景（北から）
　　（下）　馬場地区土壇状高まりの土層断面
図版２　（上）　馬場地区Ａトレンチ全景（東から）
　　（下）　馬場地区溝ＳＤ065（東から）
図版３　（上）　ロヶ坪地区Ｂトレンチ全景（南から）
　　（下）　ロヶ坪地区Ｂトレンチ北半部（南から）
図版４　（上）　中小路地区Ｃトレンチ全景（西から）
　　（下）　中小路地区Ｇトレンチ全景（東から）
図版５　（上）　宮ノ下地区遠景（東から）
　　（下）　宮ノ下地区Ｄトレンチ全景（南から）
図版６　（上）　宮ノ下地区Ｆトレンチ全景（東から）
　　（下）　古門地区Ｅトレンチ全景（西から）
図版７　（上）　県道椎田・勝山線関係（幸木地区）航空写真
　　（下）　県道椎田・勝山線関係発掘区全景（西から）
図版８　（上）　県道椎田・勝山線関係西区全景（東から）
　　（下）　県道椎田・勝山線関係東区全景（西から）
図版９　（上）　県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ100（東から）
　　（下）　県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ100（東から）
図版10　（上）　県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ106（北から）
　　（下）　県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ105（南から）
図版11　馬場・中小路・ロヶ坪・古門地区出土土器・陶磁器・瓦・木製品
図版12　宮ノ下線関係、県道椎田・勝山線西・東区出土土器・土製品
図版13　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器
図版14　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器・石製品
図版15　県道椎田・勝山線関係西区出土土器
図版16　県道椎田・勝山線関係東区出土土器・陶磁器
図版17　古門地区、県道椎田・勝山線関係出土陶磁器

Ⅰ．調　査　計　画

これまで、豊前国府の所在地については主に歴史地理学的立場から、京都郡の須磨園・津熊、仲津郡の草場・惣社を各々中心とする４つの説が提出されている。しかしながら、いずれもその所在を決定し得る根拠にやや欠けており、また、それを確証できるような考古学的調査や資料も十分ではなかった。

このような状況のなかで、その有力な比定地の一つである惣社・国作地区に圃場整備事業が計画されるに至り、この惣社・国作における考古学的知見を得るために、事前の調査として３ヶ年計画が立案された。

昭和59年度をその第１年次として、まず国府域の外郭を把握するため、その推定域と考えられる地域の北辺部を主体に鳥居・光・荒堀・徐来の４地区にトレンチを設定し調査した。調査の結果、鳥居地区では掘立柱建物１棟を、光地区では奈良期の須恵器や鴻臚館式軒平瓦１点を含む瓦片がわずかであるが出土し、奈良期の遺構の存在が予測された。また、荒堀地区では平安末期ではあるが井戸跡１基が検出され、さらに地形的には一段低い位置にある徐来地区では平安末期の遺物は出土するものの遺構の存在は否定的である等々、いくつかの貴重な知見を得ることが出来た。

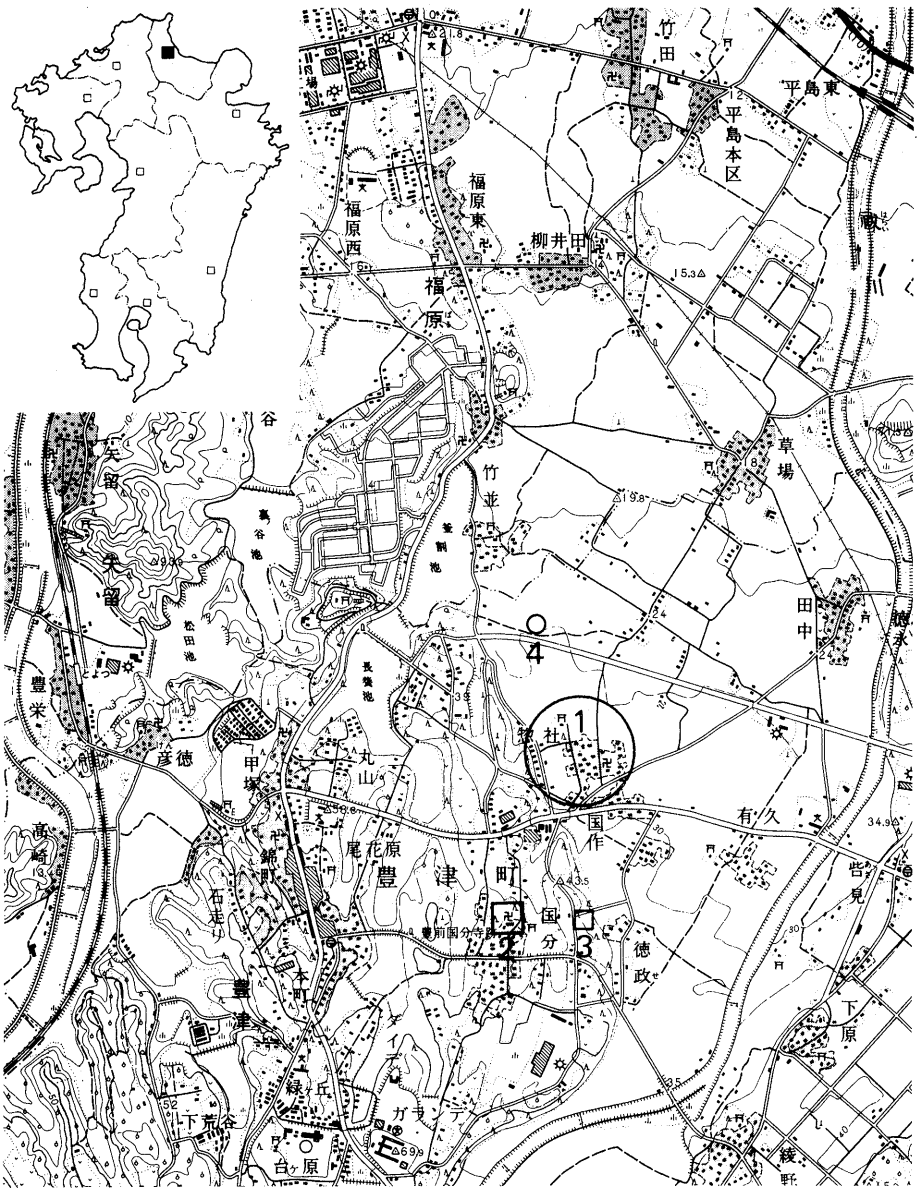
そして、昭和60年度は前年度の成果をもとに国府推定域の北半部の中心域である宮ノ下・御所の両地区における遺構の把握を目的とした。また、官道との関連から徳政地区へもトレンチを設定し調査した。その結果、御所地区では９世紀後半代～10世紀前半代の南北方向の溝を約80ｍ分検出し、埋土中から出土した遺物からみても国府推定のための示唆に富む遺構となった。宮ノ下地区では掘立柱建物と竪穴住居を含む、多数のピット群や土壙・溝などが検出され、遺物としてもかなりの量が出土するなど、国府とは直接的に結びつけ得ないものの、この地域にはかなりの遺構の拡がりがあることを推測せしめる貴重な成果を得ることとなった。

以上、２ヶ年にわたる惣社八幡宮の北側および東側の調査では、国府の所在を直接に示すような顕著な遺構は検出できなかったが、惣社八幡宮の北側における遺構の分布は御所および宮ノ下・金築の各地区を中心とした地域に限定されてくるとの予測が可能となった。

しかしながら、国府の存在を確証し決め手となし得るような遺構、例えば一般的に官衙遺構でみられる方形の柱掘形をもつ建物跡や多量の瓦の出土などと言ったような遺構・遺物の検出は未だ成果として得られるまでには至っていない。

本年度は３ヶ年計画の最終年度として、未だ調査の手が及んでいない国府推定域の南半部地域、すなわち惣社八幡宮の南側の地域を中心に調査を行うことを計画した。調査期間との関連もあり、一地区のみの集中的な調査はやめて、前２ヶ年と同様に広範囲の地域を対象として調

査を実施することとした。対象地域のなかで現状からみてある程度遺構の残存の可能性の高いところを選定し、できるだけ多くの地点を調査し、遺構の残存状況が把握できるよう計画した。今回、最も期待を寄せたのは馬場地区（削られた断面にピットと落ち込みがみられる）と宮ノ下地区の２ヶ所に残る土壇状の高まりである。



1. 豊前国府推定地　　2. 豊前国分寺　　3. 豊前国分尼寺　　4. 幸木遺跡

第１図　豊前国府推定地周辺図

II. 調　査　経　過

今年度は惣社八幡宮の前面にあたる地域、すなわち国府推定域の南半部地域に推定される一帯を対象として調査を実施した。本年度は３ヶ年計画の最終年度でもあり、国府の所在を確証し得る遺構の検出を期待し調査に着手した。

まず、調査は惣社八幡宮の南側（馬場地区）と東側（宮ノ下地区）に周囲より一段高い畑地があり、この土壇状の高まりにおける遺構の存否を確認すべく、馬場地区にＡトレンチを、宮ノ下地区にＤトレンチを設定し調査した。この土壇状の高まりについては後世に周辺部が削平されたため現在の地形になったものとの推定がなされていた。そして、馬場地区の高まり付近では軒丸瓦１点と平瓦が過去に採集されていることもあり、最も遺構の検出が期待されたところでもあった。調査の結果、Ａトレンチでは東西方向の溝１条を検出し、その埋土中からは少量ではあったが８世紀代の須恵器が出土し、国府との関連を示すものとして注意された。しかしＤトレンチでは若干の小ピットを検出しただけで国府に関する遺構の検出は残念ながらなかった。この両地域で共通してみられたのは遺構面である地山の上層には約80cm前後の厚い堆積層があり、出土遺物からこれが14世紀前後に一気に盛土されたものとの知見が得られた。

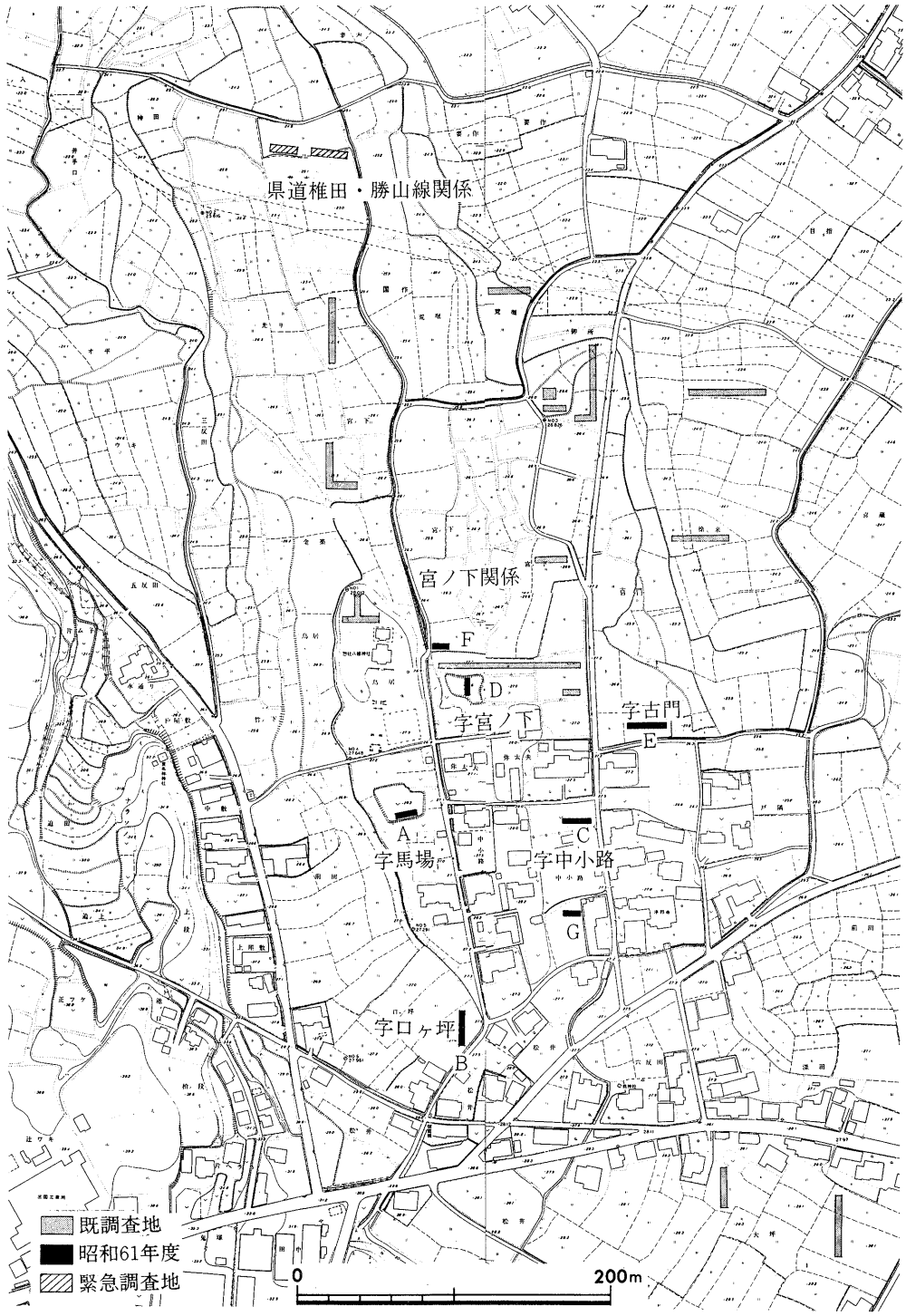
次に国府推定域の南限にあたるロヶ坪地区に南北方向のＢトレンチを設定し調査したが、トレンチの北辺部でゆるやかな地山の落ちを検出しただけで、顕著な遺構はみられなかった。耕作土・床土の直下は地山となり包含層らしきものはなく、出土遺物も細片化した少量の土器・瓦等である。

なお、惣社八幡宮の東南部の中小路地区にＣ・Ｇトレンチを設定し調査したが、現・近代の撹乱が著しく、Ｃトレンチで若干のピットを検出しただけである。

また、昨年度調査した宮ノ下地区で南北溝を検出したが、これは年代的に国府と何らかの関係があるものと考えられており、それとの関連からその溝の東側にあたる古門地区に東西方向にＥトレンチを設定した。調査地には全く包含層が認められず、この地がかなり削平を受けていることが層位の状況から判断された。さらに昨年度調査した宮ノ下地区のＤトレンチの西端の北側にあたる一段下がった地域にＦトレンチを設け調査した。ここでは明確な遺構の性格は把握できなかったが、浅い溝と土壙を検出し、遺物も少片ではあったが、ここに平安末期の遺構の存在が予測された。

以上、本年度は国府推定域の南辺部を中心に計７ヶ所にトレンチを設定し調査した。調査は昭和61年10月27日に開始し、同年11月20日には埋め戻し作業を残し、写真・実測などの調査を終了した。

また、ここでは既往の調査として福岡県教育委員会文化課によって実施された「宮ノ下線道



第2図　国作地区トレンチ配置図

路拡幅工事に伴う調査」（昭和56年）と「県道椎田・勝山線工事に伴う調査」（昭和53年）の緊急調査についての結果も伴わせ報告することとした。

調査の関係者は次のとおりである。

発掘調査指導委員

横山浩一　考古　九州大学文学部教授
西谷　正　〃　〃　助教授
小田富士雄　〃　北九州市立考古博物館長
（故）定村責二　〃　豊津町史編纂委員
山本輝雄　建築　九州大学工学部助手

総括　豊津町教育委員会　教育長　吉田無佐治
庶務担当　社会教育課　課長　山田圀貴
係長　坂田重孝
主事　秋吉良晴
調査担当　九州歴史資料館調査課　課長　石松好雄
技術主査　横田賢次郎
福岡県教育庁京築教育事務所　技術主査　木下修
豊津町教育委員会社会教育課　嘱託　末永弥義

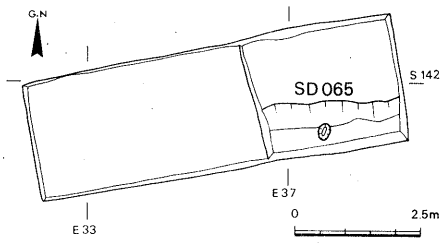
地区名		トレンチ m×m＝m²		主な検出遺構
国作	馬場	A	2.5×7.5＝18.75	溝
	口ヶ坪	B	3 × 24 ＝ 72	地山の落ち
	中小路	C	3 × 15 ＝ 45	ピット
		G	3 × 5 ＝ 15	
	宮ノ下	D	3 × 9 ＝ 27	ピット
		F	3 × 6 ＝ 18	溝　土壙
	古門	E	3 × 27 ＝ 81	ピット

Ⅲ．遺　　構

(一) 本年度の調査

1．馬場地区（第３図、図版１・２）

惣社八幡宮の南側前方に比高差2.0m前後の高まりが現在みられる。このような高まりは同社の東側の宮ノ下地区にもほぼ同じ状況で１ヶ所存在している。この高まりについては、総社宮を含むこの一帯が本来この小台地の高さで広がっており、現在２ヶ所でみられる小台地の高まりはその痕跡であるとの解釈がなされていた。また、この小台地の周辺から軒丸瓦と平瓦が以前に採集されており、ここに何らかの遺構が残存する可能性が示唆されていた。



第３図　馬場地区遺構配置図

今回はこの小台地における遺構の把握を目的として調査にのぞんだが、調査個所の制約もあって、台地南端に2.5×7.5mのＡトレンチを設定し調査した。

調査の結果、トレンチの南側で東西方向の溝ＳＤ065を検出した。ここでは遺構面に達するまで、表土下に約80cmの茶褐色土層と暗褐色土層の厚い堆積層がある。この二つの層はほとんど区別出来ないほど酷似しており、層の乱れもない。この層中には細片化した若干の土器を含み、そのなかには最も新しい遺物として14世紀代のものが確認できた。そして土層の観察から得た知見では、ある時期に一気に土盛整地がなされたと考えられ、その時期を14世紀代に比定することも出来る。

現在２ｍ程の小台地となっているが、遺構面は現地表より約１ｍ低い位置にあり、周囲と比較しても現状でみられる程の高低差がなかった事が確認できた。

溝

ＳＤ065　深さ45cm前後の東西溝である。長さ３ｍ分を検出しただけであるが、さらに東西にのびている。北側の溝肩は確認できたものの、南側の溝肩は台地の段落ちとなるため確認できなかった。検出範囲が狭く断定できないが、この溝は台地南端をほぼ東西方向に走るものと考えて大過なかろう。溝埋土中からは土器少片が出土したが、その中には古墳期のものも含むが、最も新しいものとして、８世紀中頃前後のものがみられる。

2．口ヶ坪地区（第４図、図版３）

国府推定域の南限を確認するため、南北方向に３×24ｍのＢトレンチを設定し調査した。トレンチを設定した地点は、これまで提起されている惣社八幡宮を含めた地域を国府域に推定する各説の国府域南限にあたるところである。

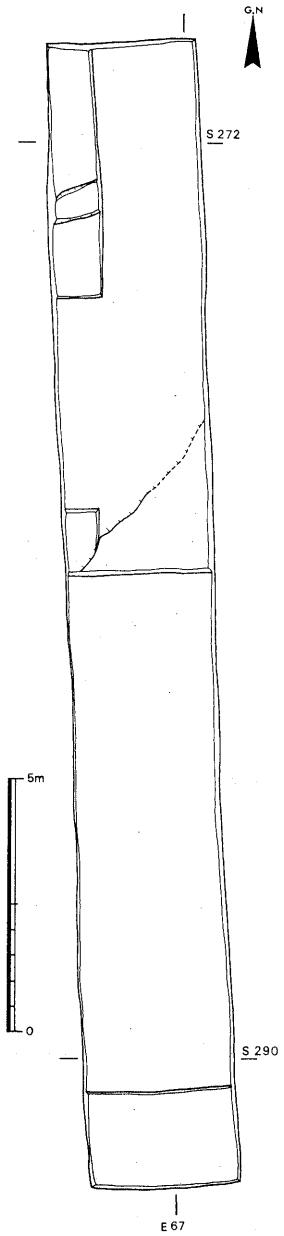
調査の結果、ここでは国府域の南限を示すような溝等の遺構の検出はなく、また国府に直接関連する遺構も検出されなかった。調査地は耕作土・床土を除去すると暗灰色粘土層となる。この暗灰色粘土層はトレンチの南半分では約20cmの厚さで堆積し、その直下に地山がある。この地山は北方に向ってゆるやかに傾斜し、トレンチ北端では南側に比べ約30cm弱下がっている。当然にして地山上に堆積する暗灰色粘土層も北端では約40cmの厚さとなる。この暗灰色粘土層中には土器や瓦の細片化したもの、腐蝕の著しい木片（用途不明の木製品１点が出土）が若干みられるだけである。この暗灰色粘土層は全面発掘したわけではないが、トレンチ西側の試掘溝では地山面を切って溝状の凹みがあり、そこからは弥生期の土器片が数点出土している。暗灰色粘土層は粘性のきわめて強いもので、地山との判別がつき兼ねる程の状況であった。因みに、馬場地区小台地の遺構面とこの地域の地山面との比高差は1.4mあり、当地域が低くなっている。

3.　中小路地区（第５・６図、図版４）

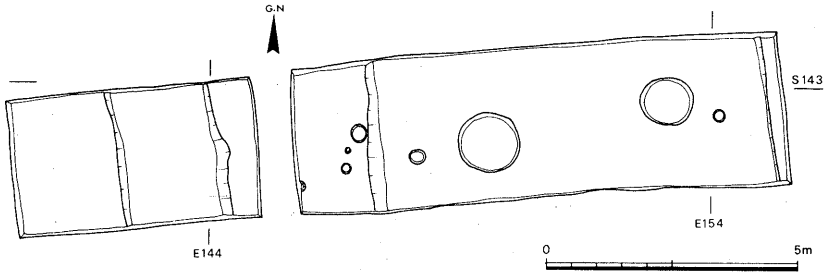
本調査地域は総社八幡宮の東南方にあたる地域で、国府推定域のほぼ中央部付近に位置する。昨年度実施した宮ノ下地区の調査で検出した南北方向の溝ＳＤ035の延長線上にあたる。このＳＤ035は幅40cm前後、深さ30cmの小溝で、これは９世紀末～10世紀前半代に考えられるもので、年代的に国府と関連する遺構と推定されている。

今回の調査の主たる目的はこの南北溝ＳＤ035が果してこの地域まで延びるかどうかを確認することにあった。調査の結果、深さ80cmにわたって現代の撹乱層がみられ、当地域ではＳＤ035の延長部は検出できず、また顕著な遺構の検出もできなかった。トレンチの東端部と中央部分には黄色粘質土の地山が残存しており、ここには茶褐色の埋土をもつ小ピット群が検出されていることからみると、この地域が近代になって、かなりの削平をうけたものと判断できる。

また、Ｃトレンチの南方約60ｍの所に３×５ｍのＧトレンチを設定し調査した。当地域は現在荒地となっているが、最近まで住宅の存した所である。今回の調査は当地が国府推定域の東南辺部にあたることから、それに対する遺構の確認を目的として実施し

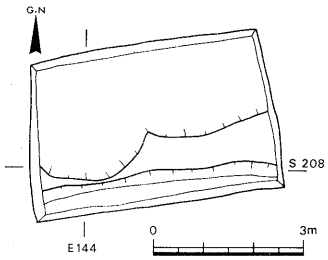


第４図　ロヶ坪地区遺構配置図



第5図　中小路地区遺構配置図（Cトレンチ）

た。調査の結果、当地は住宅建設時の基礎工事、廃棄物の処理のための大きな穴が掘られており、国府ないしそれに関する古代・中世の遺構については何ら検出できなかった。

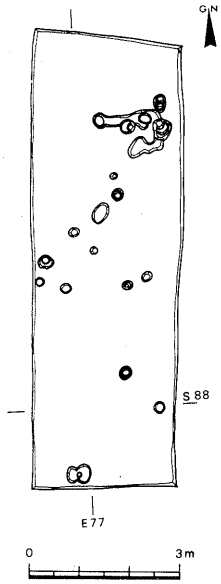


第6図　中小路地区遺構配置図（Gトレンチ）

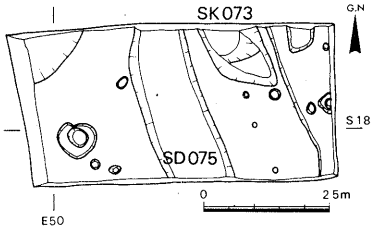
4.　宮ノ下地区（第7・8図、図版5・6）

総社八幡宮の東側にある小台地上に3×9mの南北トレンチを、その台地の北方の一段低くなったところに3×6mの東西トレンチを設定し調査した。

小台地の高まりは先述の馬場地区の高まりと似ている。調査の結果、表土の下は茶褐色土層と暗褐色土層の厚い堆積がみられ、土質、色調とも馬場地区のそれと酷似している。この層中からは土器の細片化したものが含まれ、その中には近世に属するものはなく、14世紀代のものが最も新しい遺物として認められる。地山は暗茶黄色の粘質のかたい層で、それに掘られた小ピットが若干検出された。このピット中からは年代の決め手になる遺物の出土はなかったが、上層の堆積土から判断して、おそくとも14世紀代か、それより以前のものと判断できる。因みに、馬場地区の遺構面と今回のDトレンチの遺構面との高低差はこの地区が約50cm程低くなっている。



第7図　宮ノ下地区遺構配置図（Dトレンチ）



第8図　宮ノ下地区遺構配置図（Fトレンチ）

Fトレンチは総社八幡宮の東側を南北に走る道路（宮ノ下線）の東側に接して設定した。3×6mの小範囲であったが、今年度調査のA～Gトレンチの中では比較的に遺物の量も多い。トレンチ中央部で幅1m、深さ20cm前後の浅い溝と不整形の土壙を検出し、そこからは12世紀代～13世紀代の土師器片と陶磁器片が出土している。

5. 古門地区（第９図、図版６）

昨年度実施した宮ノ下地区設定のＤ・Ｅトレンチの東側に３×27ｍのＦトレンチを設定し調査した。この「字古門」地区の東側の「字徐来」地区とは１ｍ前後の高低差があり、東側に向って地形的に下がっていく。すなわち「字古門」地区は台地状を呈するこの一帯の東端にあたる。昨年度の調査で検出した南北溝ＳＤ035は国府域の東限を示す可能性が指摘されており、その外側にあたる地域と段丘の東端における遺構への知見を得るため調査を実施した。

調査の結果、地山面に切り込む直径20cm前後のピットをわずか検出したのみで、遺構らしきものは確認できなかった。耕作土・床土の直下に地山があり、包含層はほとんど認められなかった。昨年度の調査のＤ・Ｅトレンチの調査結果ではこの地域がかなりの削平を受けたとみられており、今回の調査でも、ほとんど包含層がない点などから、後世削平された可能性は十分考えられる。

㈡ 既往の調査

ここでは、昭和56年に実施した宮ノ下線道路拡幅工事に伴う緊急調査と昭和53年に実施した県道椎田・勝山線建設工事（幸木地区）に伴う緊急調査について報告する。

1. 宮ノ下線道路拡幅工事に伴う調査

調査地は総社八幡宮境内の背後の隣接した地域である。道路拡幅部分に1.5×28ｍの南北トレンチを設定し調査した。調査の結果、溝３条を検出したが、いずれも深さ20cm前後の浅い溝であり、調査範囲も狭く遺構の性格については明らかでない。

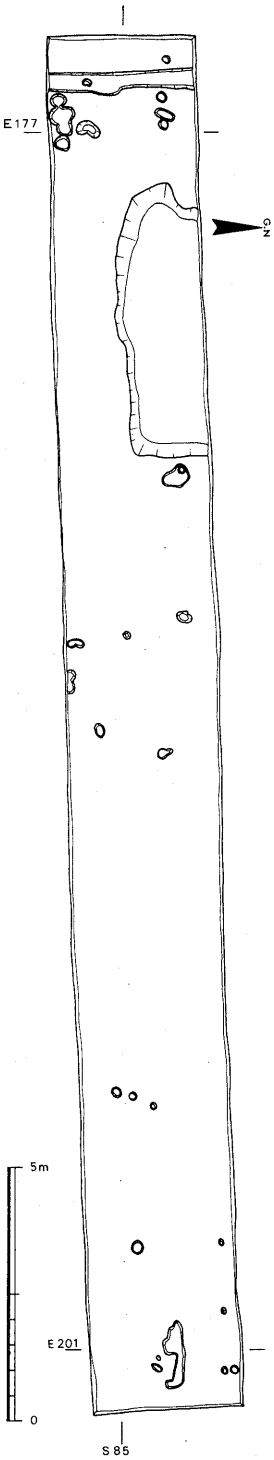
溝

SD081 発掘区を斜めに走る浅い溝で、その一部を検出した。幅１ｍ前後・深さ20cm前後を測る。ここからは白磁椀Ⅳ類などと土師器片が出土している。

SD082 やや蛇行しながら、ほぼ南北に走る溝である。この溝は幅約２ｍ、深さ20cm前後の溝である。ここからは12世紀後半代の土師器と白磁椀Ⅳ類等が出土している。

2. 県道椎田・勝山線建設工事に伴う調査（図版７～10）

調査地は国府推定域の北限の中央部付近にあたる。昭和51年には東北方の隣接地で調査が行われており、９～10世紀の溝が検出され



第９図　古門地区遺構配置図

ている。予定路線内に10×21m（西区）と4mの間隔で9×27m（東区）のトレンチを設定し調査した。調査面積は西区・東区を合わせ450m²で、期間は昭和53年1月10日に開始し、同年2月25日に終了した。地番は豊津町大字国作字幸木749である。

西区の遺構

検出した主な遺構は井戸3基・南北および東西方向の溝6条それに径20cm前後のピット群である。耕作土・床土を除去すると約30cmの厚さで黒灰色土層（3層）その下にほぼ同じ厚さで黒褐色土層（4層）があり、その直下に地山が検出される。遺構はこの地山面に掘り込まれている。

溝

SD110・114・118　検出した溝はいずれも深さ20cm前後のもので、ほぼ南北方向のものが多い点が注目される。

井戸

SE100　発掘区西端で検出した井戸である。掘形の上端径約2m、下端径約0.5m、深さ約1mで掘形は三つの段を有する。

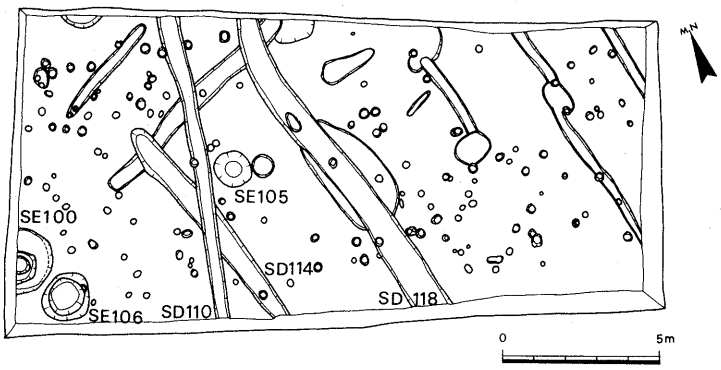
SE105　ほぼ正円形を呈し、掘形の上端径約1.3m、下端径0.5m、深さ約1.2mのものである。SE100を除いて掘形の上端径が小さいこと、また、いずれも井戸枠が残存していないこと等から井戸跡とするにはやや疑問もあるが、他の用途が明らかでないので、ここでは一応井戸跡として報告しておく。

SE106　SE100に隣接する位置にある。掘形の上端径約1.5m、深さ1.3mを測る。

第10図　宮ノ下線関係遺構配置図

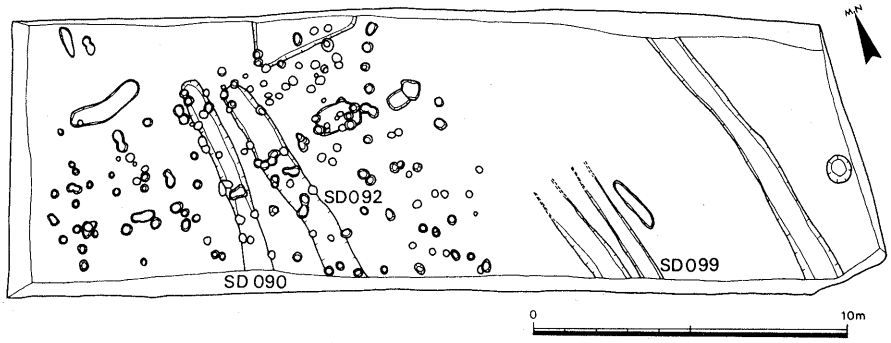
東区の遺構

この区では南北方向の溝5条と径20cm前後のピット群を検出した。溝は深さ10cm前後の浅いもので、中途で消失するものや、掘形が明瞭でないものがある。いずれも南北の方位をとる点、西区検出の溝と似ていることは注目されるが、性格につ



第11図　県道椎田・勝山線関係遺構配置図（西区）

いては不明である。ピット群の中には柱根らしきものや底部に小礫を入れたものがみられるものの、建物としてはまとまらない。浅い溝からは若干の遺物が出土している。また、層位の状況は西区とほとんど同じであり、発掘区東端ではやゝ地山面が高くなる傾向がみられる。



第12図　県道椎田・勝山線関係遺構配置図（東区）

Ⅳ．遺　　物

本年度の調査で出土した遺物はきわめて少量であり、細片化したものが多い。顕著な遺構からの出土は馬場地区検出の溝ＳＤ065と宮ノ下地区検出の土壙ＳＫ073である。ここではＳＤ065および、ロヶ坪、中小路地区出土の遺物について報告する。

また、既往の調査である「宮ノ下線道路拡幅工事に伴う調査」および「県道椎田・勝山線建設工事に伴う調査（幸木地区）」によって出土した遺物についてもあわせ報告する。

㈠　本年度調査出土遺物

1.　馬場地区出土土器・瓦（第13・14図、図版11）

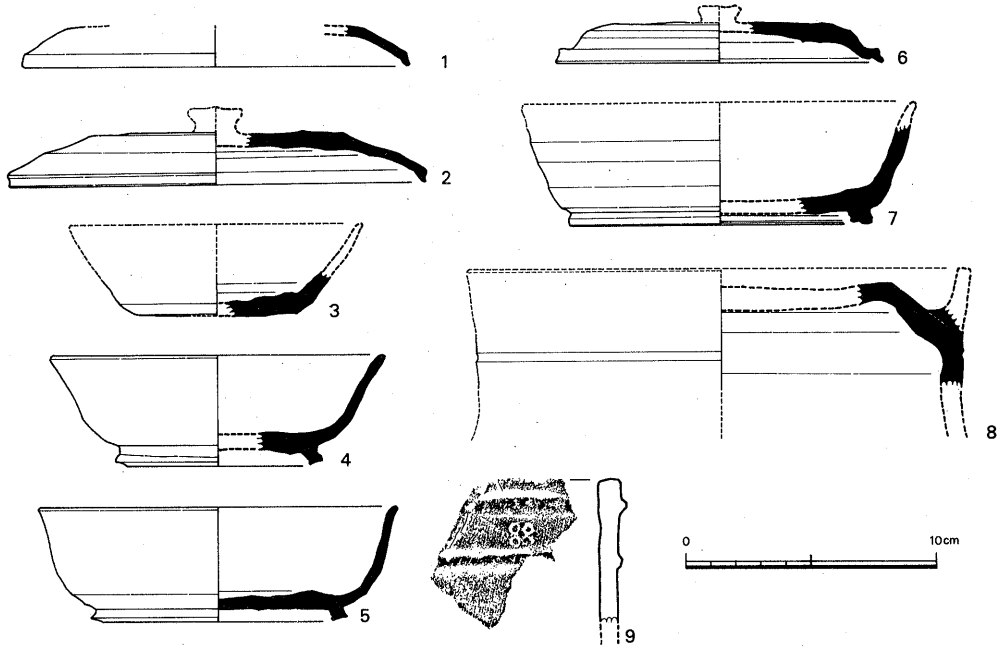
ＳＤ065出土土器

ここからは弥生・古墳期の土器も数点出土している。

須恵器

蓋（１・２）　１は口縁部の小片であり、外天井部にはヘラ削りの痕跡らしきものがかすかに認められる。２は口径16.6cmに復原でき、外天井部はヘラ削り再調整を行っている。断面三角形の口縁部はシャープである。

杯（３～５）　３は無高台で、底部と体部の一部が残存している。底部はヘラによるナデ調整らしきものがみられるが、平滑とはなっていない。また体部の下位はヘラ削り再調整している。４・５は有高台の杯である。高台を外開きにし、畳付きは凹状にする。

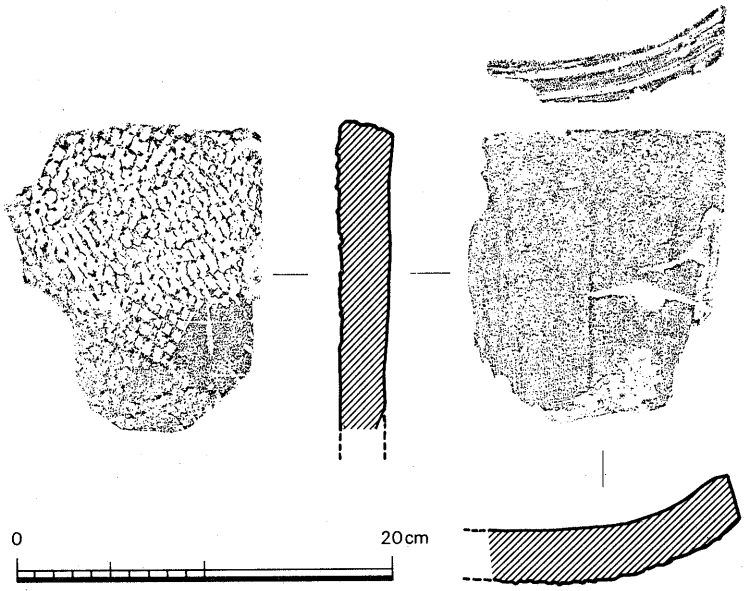


第13図　馬場・中小路地区出土土器実測図

1～5は8世紀中頃前後に比定される。

瓦　類

平瓦（ロ）　Aトレンチを設定した小台地の東南隅部斜面から表採したものである。平瓦の隅部片である。凸面には細かい斜格子目の叩き目が重複してあり、一見縄目状を呈している。側面と端部はヘラ削りしているが、端部には2条の凹線がみられる。この凹線が重弧文状に意識して施文されたものか、削り等の調整時についたものかは定かでない。これと同種のものが以前にこの地で採集されている。



第14図　馬場地区出土瓦実測図・拓影

2. 中小路地区出土土器（第13図、図版11）

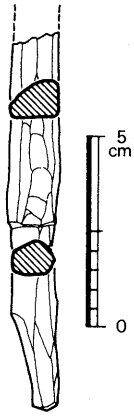
6・7はCトレンチ、8・9はGトレンチからの出土であり、いずれも現・近代の撹乱土層中から検出したものである。

須恵器

蓋（6） 小片であるが口径13.0cmに復原できる。体部と口縁部の境に明瞭な屈曲をなす。外天井部はヘラ削り再調整を行う。

杯（7） 口縁部を欠失するが、やや大形のものである。高台畳付部には明瞭な凹線がみられ、全体的に器肉は厚い。

硯（8） 小片であるため、硯とするにはやや疑問もあるが、残存部の屈曲から硯部と脚部を連続して製作する硯と考えた。外面には外堤の貼付痕とその下位に沈線一条がある。



第15図
ロヶ坪地区出土木製品実測図

土師質土器

鉢（9） 口縁部の外面には2条の凸帯を貼付し、その間には花文のスタンプが残存部に1個みられる。

3. ロヶ坪地区出土木製品（第15図、図版11－ハ）

用途不明木製品（ハ） トレンチの西端部に設けた試掘坑内の暗灰色粘土層から出土した。上部を欠失しているため全形は知り得ない。全体に削り痕が明瞭に残り、残存部の中位には段を有し、先端部を細くする。

4. 古門地区出土陶磁器（図版11－イ、図版17－ホ）

緑釉陶器

椀（イ） 底部の小片であり、椀となるのか皿であるのか不明である。暗緑色の釉が施されるが剝落が著しい。胎土は土師質のものである。

白 磁

椀（ホ） II－1類の底部片である。釉の風化が著しい。

(二) 既往の調査出土遺物

1. 宮ノ下線関係出土土器・陶磁器・石製品（第16～19図、図版12～14、22頁表）

SD081出土陶磁器

白 磁

椀（18） 白磁椀Ⅳ－1・a類である。

SD082出土土器・陶磁器

土師器

皿（1～9） 口径8.9～10.4cm、器高1.2～1.9cmである。全て底部は糸切りで、板状圧痕はみられない。

杯（10～16）　口径13.5～17.0cm、器高3.3～3.7cm、底径10.7～11.8cmを測る。底部は全て糸切りである。

白　磁

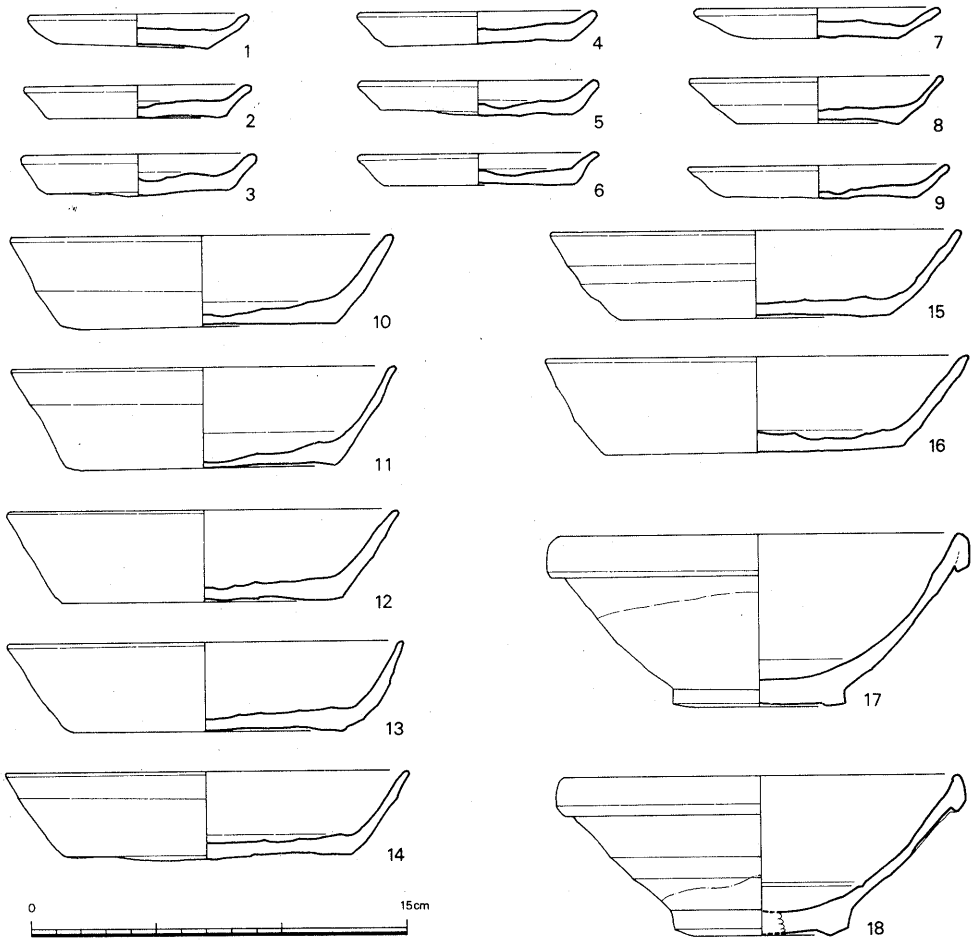
椀（17）　白磁椀Ⅳ－１・ａ類で、約$\frac{2}{3}$が残存している。口径16.8cm、器高6.7cmを測る。

層位出土土器・陶磁器・石製品

須恵器

甕（41）　全面に細かい正格子の叩き目を有するが、その上からカキ目を施しており、そのために正格子の叩き目はやや不明瞭となっている。叩き目とカキ目は頸部との接合部までみれる。６世紀後半代～７世紀初頭頃のものと考えられる。

鉢（42）　片口の鉢である。口縁部の断面は略四角形を成し、体部から口縁部はほぼ直線的で



第16図　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器実測図（１）

ある。外面には大きい格子の叩き目があるが、大部分はナデ調整のために消されている。内面は不明瞭であるがヨコナデである。外底は未調整で、板状の圧痕がかすかに残る。

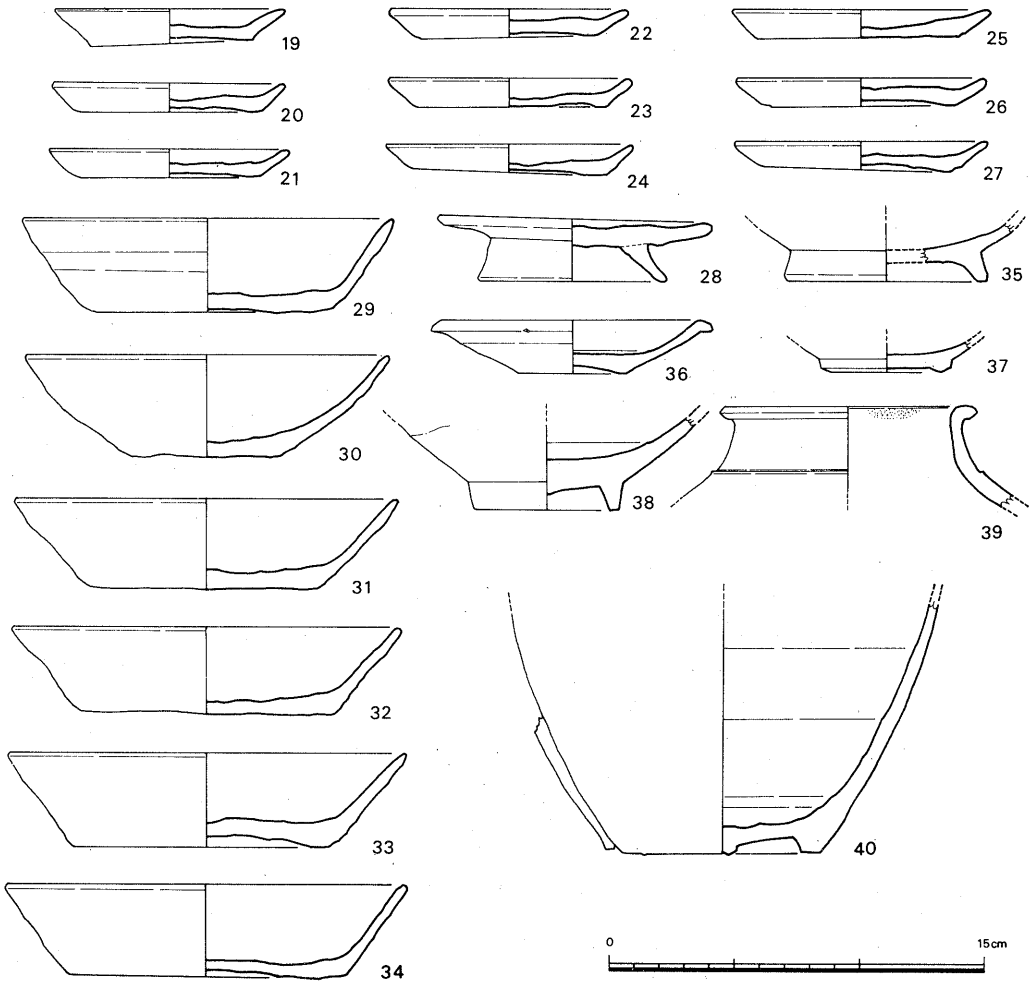
土師器

皿a（19～27）　口径9.2～10.2cm、器高1.1～1.5cm、底径6.4～8.0cmである。全て底部は糸切りで、20と27には板状圧痕がみられる。

皿c（28）　口径10.8cm、器高2.5cm、高台径7.4cmを測る。

杯（29～34）　口径14.4cm、器高4.5cm、底径5.9cmの30（杯b）と口径15.0～16.0cm、器高3.4～3.7cm、底径9.1～11.0cmの29・31～34（杯a）に分かれる。底部は全て糸切りである。

鍋（43）　口径を28cmに復原できる鍔を有する土鍋片である。胎土は赤褐色を呈する粗い胎



第17図　宮ノ下線関係出土土器・陶磁器実測図（2）

土である。外面には著しい煤の付着がみられる。

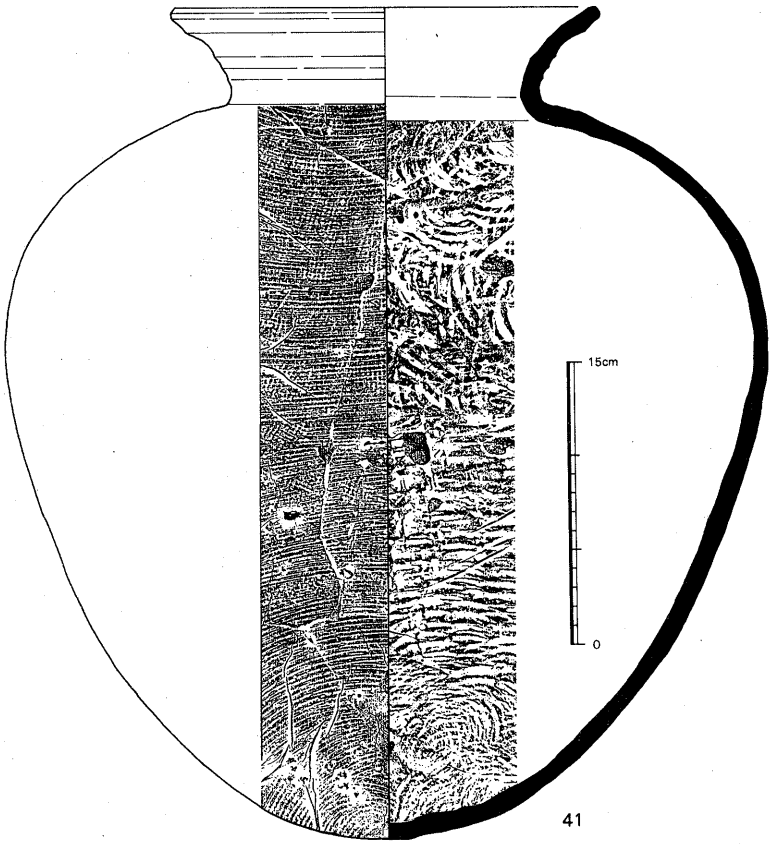
灰釉陶器

椀（35）　椀の底部片が出土した。内面にわずかに釉がのこる。外底には糸切り痕がみられる。

白　磁

皿（36・37）　37はII類、36はⅣ－1・b類である。36の残存部には輪花が1個残存する。やや厚目に施釉され、外底は露胎となる。

椀（38）　V類の椀である。外面体部下半から底部は露胎となる。



第18図　宮ノ下線関係出土土器実測図（3）

褐釉陶器

壺（39・40）　39の外面には褐釉の痕跡がわずかに残っているが、風化のためか釉の剝落が著しい。口縁端部には重ね焼の痕跡を残す。胎土は淡茶色を呈する。40は黄緑色の強い釉がうすく施釉される。施釉は残存部の内面にもあり、全面施釉と考えられる。体部下半には焼成時に癒着した別個体の体部片がみられる。

石製品

石鍋（44～46）　44・45はいずれも小片であるが、方形の耳を有し、体部が直線的に立ち上がるタイプである。46は鍔付きの体部を内彎させるもので、石質、調整ともに良好である。口縁部は約半分残存しているがそのプランはほぼ正円形である。

2.　県道椎田・勝山線関係出土土器・陶磁器（第20・21図、図版12・15～17、22頁表）

西　区

層位出土土器

土師器

皿（1～3）　口径8.6cm、器高2.0cm、底径4.5cmの1（皿b）と口径9.2～9.6cm、器高1.0～1.2cm、底径6.6～7.0cmの2・3（皿a）の2種がある。いずれも底部は糸切りである。

杯（4・5）　4は口径11.9cm、器高3.8cm、底径6.6cmで、底部はヘラ切り離しである。5は器高が高く底径の小さいもので（杯b）底部には糸切り痕をのこす。口径15.8cm、器高3.6cm、底径6.6cmを測る。4は9世紀後半代、5は12世紀中頃前後の時期に考えられる。

瓦　器

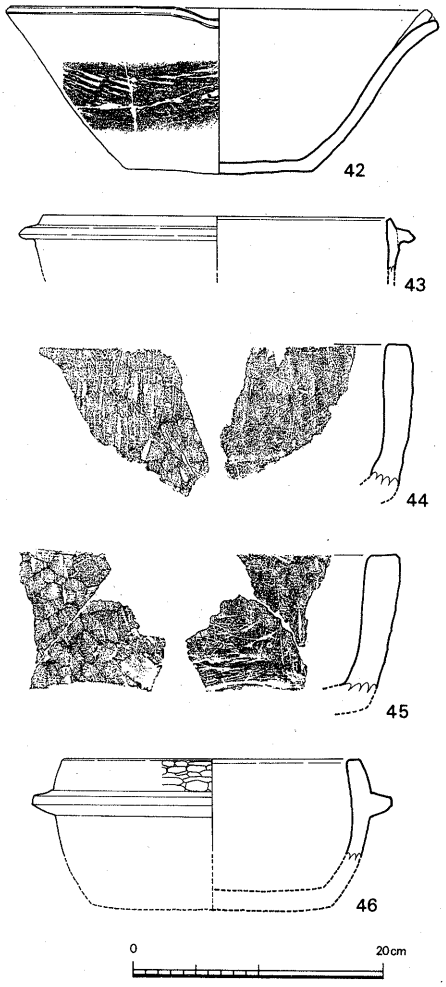
椀（6）　全体に器肉の薄い瓦器椀で、内外面にジグザグの粗いミガキを施す。外面体部下位には指頭痕の凹凸がみられる。黒灰色を呈し、堅緻に焼成されている。

SE100出土土器

土師器

皿（9）　口径9.6cm、器高1.2cm、底径6.8cmで、底部は糸切りである。

杯（10）　口径12.6cm、器高3.5cm、底径8.0cm。底部はヘラ切りである。10世紀前半代。



第19図　宮ノ下線関係出土土器・石製品（4）

椀（12～15）　12は高い高台を貼付する椀である。内面には磨滅のため余り明瞭でないが、粗いミガキが施される。13～15は内外面を粗くヘラミガキするが、とくに13・14には一部黒色を呈するところがみられ、内外面を黒色に燻す黒色土器Bの可能性もある。15は出土遺構にやや疑問がある。12～14は11世紀代、15は11世紀後半代頃と考えられる。

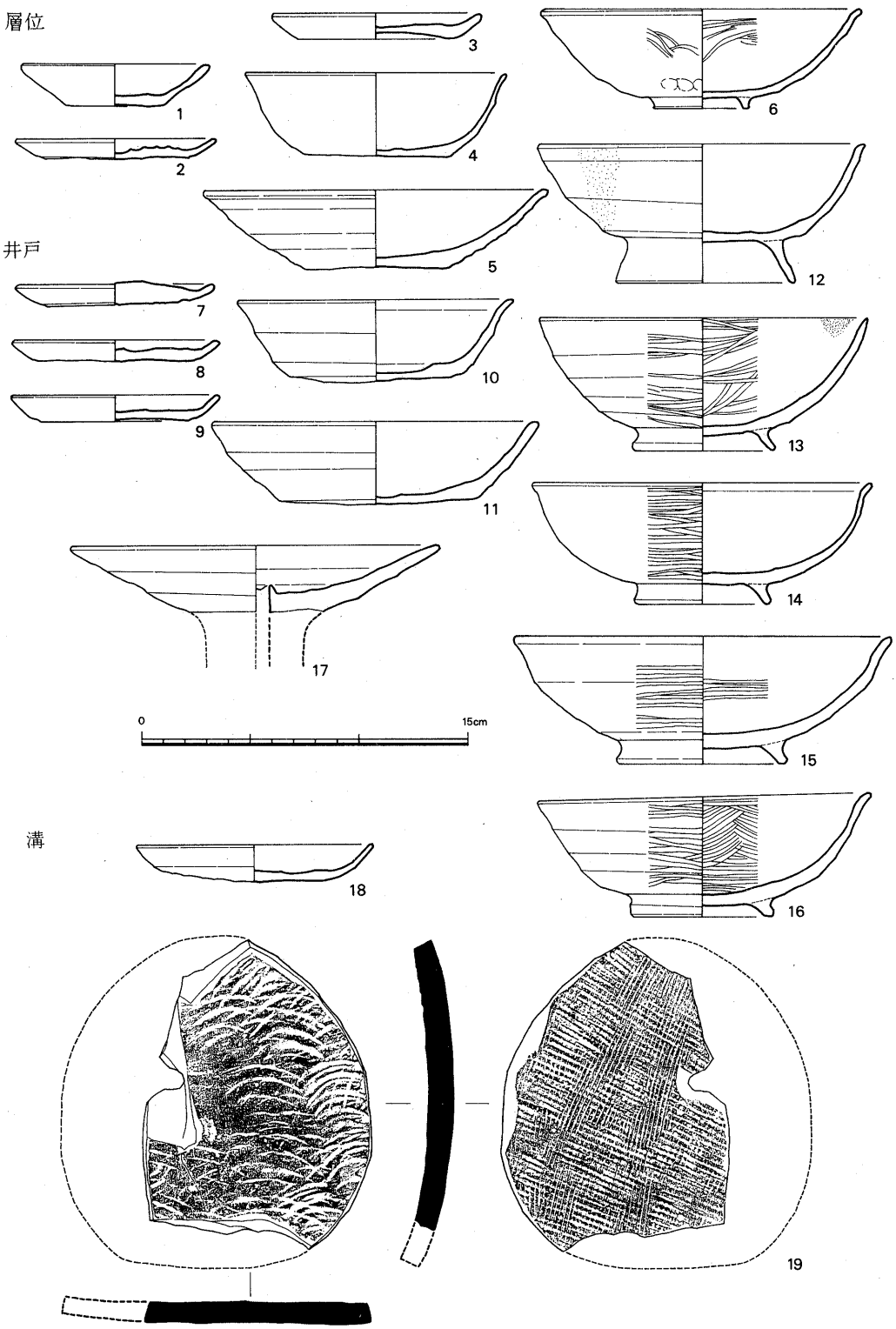
器台（17）　丸底の杯を杯部・脚部とし、上下が不明瞭なものである。杯部はヨコナデでミガキなどの再調整はしていない。

SE105出土土器

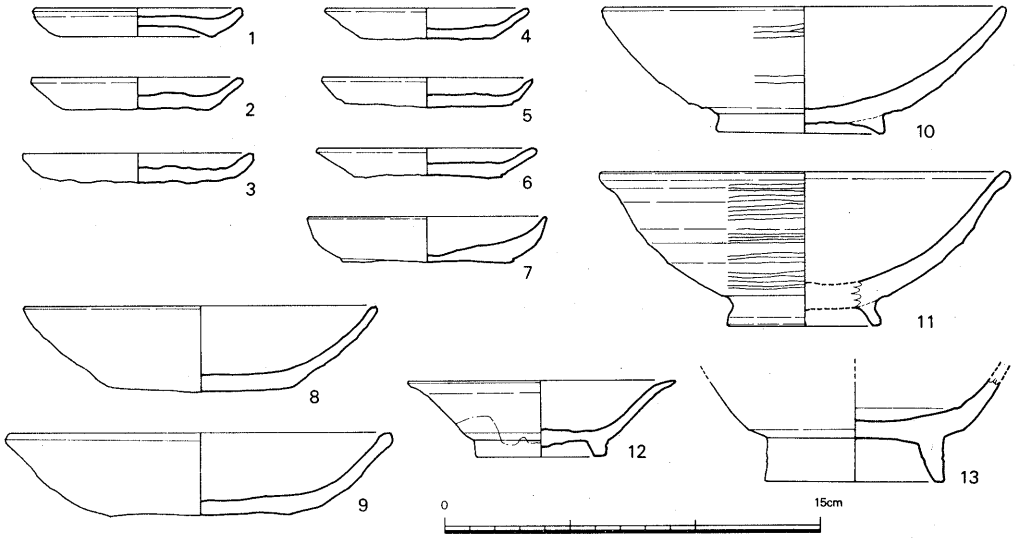
土師器

皿（8）　口径9.6cm、器高1.0cm、底径7.8cm。底部は糸切りである。

杯（11）　器高が高く、やや底径の小さい杯である。底部は糸切り離しである。



第20図　県道椎田・勝山線関係出土土器・土製品実測図(西区)



第21図　県道椎田・勝山線関係出土土器・陶磁器実測図（東区）

黒色土器

椀（16）　口径15.3cm、器高5.5cmである。内外面を黒色に燻す黒色土器B類である。内面は丁寧で密なヘラミガキを施すが、外面はやや粗い。焼成も堅緻で精良である。11世紀中頃と考えられる。

SE106出土土器

土師器

皿（7）　底部の器肉が厚く、口縁部をわずかに引き出す。底部は糸切り離しである。

SD118出土土器

土師器

皿（18）　口径10.8cm、器高1.7cmで、底部はヘラ切りである。

塩壺（図版12－イ）　小片であるが3片が出土している。出土遺構についてはやや不明瞭であるが、2片は西区の溝と黒灰色土層から、他の1片は東区の黒灰色土層から出土している。いずれも内面に粗い布目を有し、胎土は砂粒を多く含む。

土製品

猿面硯（19）　須恵器の甕の体部片を転用し、硯として使用している。オムスビ形を呈し、側面は磨いて整形している。内面のあて具痕は硯として使用されたため平滑となっている。

東　区

黒灰色土層出土土器・陶磁器

土師器

皿（１～３）　口径8.2～9.0cm、器高1.1～1.3cmである。全て糸切りである。

杯（８）　器高が高い、底径の小さい杯ｂである。底部は糸切りである。

椀（10・11）　いずれも内外面をヘラでミガいて器面を調整する。11の内面のヘラミガキは余り明瞭でないが密に施している。11世紀後半代と考えられる。

白　磁

皿（12）　Ⅲ類で、内面の見込みを輪状に釉をカキ取る。

青　磁

椀（13）　高台を高く削り出し、外面の体部下位には削りによる屈曲がみられ、内面の見込みと体部とが明瞭に境をなす。やや空色味の強い淡緑色の釉がうす目に施釉されるが、外面の体部下位と高台部は施釉後カキ取られ露胎となっている。

その他の陶磁器（図版17）

白　磁

椀（イ～ハ）　幸木西・東の両地区から出土している。イはⅣ－１・ａ類、ロはⅧ－２類、ハはⅤ－３類で、底部と口縁部片である。この他にも各地区から陶磁器が出土しているが、そのほとんどが白磁である点は注目される。

青白磁

壺（ニ）　小片であるため全形は知り得ないが、小壺の頸部と肩部付近と考えられる。肩部には花文状のものを貼付している。内・外面に淡い空色気味の釉がうす目に施される。

Ⅴ．結　　語

昭和59年度から実施してきた豊前国府跡推定地に対する発掘調査は本年度をもって一応終了した。この３年間における発掘調査は結果的に惣社八幡宮を中心として22本のトレンチを設置して行い、総面積はおよそ2,000m²に及んだ。しかしながら豊前国府に関するものと考えられる明確な遺構は検出できず、将来に課題を残すこととなった。ここでは３年間にわたる発掘調査によって得られた遺構・遺物をもとにして国府推定地としての国作、惣社地区について検討を加え結びとする。

まず周辺地形から見た遺構の状況について見ていこう。当該地は南から北へ向ってゆるく傾斜しており、惣社八幡宮の東・西は谷となっている。すなわち東側は字古門と徐来の字界を境にして東側がおよそ２ｍほど低くなっている。また西側は字光り、宮ノ下、鳥居の界線から西側は階段状に低くなっている。したがって国府関係の遺構が存在するとすれば、その範囲は八幡宮を中心とした東西およそ250ｍ位の幅の中に存在していることが考えられる。さらに八幡宮の東側と南側には周辺よりも約１ｍほど高くなった所がある。周辺の地形からみて、いかにも

不自然な地形であり、この一帯が、ある時期に削平されたことが考えられる。このことは昭和60年度に行った八幡宮東側の調査によって、明らかに削平されていることが判明した。さらに昭和61年度に行った八幡宮南側の調査では、遺構はほとんど検出されていない。以上のような点からみて、遺構は主に八幡宮北側の字宮ノ下、光り、御所、金築、幸木を中心とした地域に遺存していることが推測されるにいたった。次に3年間の発掘調査で検出した遺構としては掘立柱建物、竪穴住居、溝、井戸、土壙などがある。これらの中で、国府との関連性が考えられるものとして、唯一、字宮ノ下において検出した南北溝（SD035）がある。およそ80m分を検出したが、4度ほど西へ振れている。埋土中から出土した土器からみて9世紀末ないし10世紀前半代のものとみられる。

一方、遺物の面からはどうであろうか。まず土器類では弥生土器を別にすると大体7世紀代から12世紀前後にかけてのものがある。種類としては一般的な須恵器、土師器のほかに越州窯系青磁、白磁、緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶磁器が含まれていることは注目しておく必要があろう。

各種遺物のなかで国府の所在を推定する上で有力な資料となるのは瓦類であろう。かつて八幡宮南側の畑地から軒丸瓦が採集されているが、今回の調査でも、少量ではあるが各トレンチから丸、平瓦が検出されるとともに字光りでは鴻臚館式軒平瓦が出土した。このことは明確な遺構こそ検出されていないが八幡宮周辺の一画に瓦葺き建物が存在していたことを示すものであろう。この他官衙の存在を推測させるものとして円面硯や須恵器甕の胴部を利用した転用硯が出土している。

以上、最初に述べたように明確な遺構は検出されなかったものの、今回の調査で検出した遺構、遺物の中には官衙の存在を推測させるに十分なものも含まれており、性急な結論を出すことは、さしひかえるべきであろう。いずれにしても今後さらなる調査が必要であることはいうまでもない。

参考文献

平野　邦雄　「豊前の条里と国府―古代政治勢力の所在をめぐって」『九州工業大学研究報告』人文社会科学6　九州工業大　1958.3
米倉　二郎　「九州の条里」『九州アカデミー』1　文画堂　1960.5
白石　　寿　「豊前国府について」『美夜古文化』17　1966
木下　　良　「国府と条里との関係について」『史林』50－5　史学研究会　1967.9
木下　　良　「豊前国府址についての一考察」『美夜古文化』18　美夜古文化懇話会　1967.12
藤岡謙二郎　「豊前・豊後の国府」『国府』日本歴史叢書25　吉川弘文館　1969.12
日野　尚志　「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論集』佐賀大学教育学部　1974.8

小田富士雄　「豊前と豊後の国府」『日本歴史地理総説―古代編』吉川弘文館　1975.6
木原　武雄　「豊前国府についての一考察」『美夜古文化』22　美夜古文化懇話会　1976.4
豊津町教育委員会　『幸木遺跡』豊津町教育委員会　1976.8
小田富士雄　「豊前国府について」『とよ』創刊号　豊前国府・国分寺調査研究会　1976.10
戸祭由美夫　「豊前国府考」『歴史地理研究と都市研究』上　大明堂　1978.4
前原平三郎　「豊前国府址と瓦」『地域相研究』4　1978
戸祭由美夫　「豊前国」『古代日本の交通路』Ⅳ　大明堂　1979.1
戸祭由美夫　「日本の古代都市・豊前国府」『地理』25－9　古今書院　1980.9
前原平三郎　「豊前国府推定地出土軒平瓦」『九州古文化研究会会報』18　同研究会80
武末　純一　「豊前国府跡」『九州古瓦図録』九州歴史資料館　1981.11
木原　武雄　「豊前国府」『大宰府管内国府の研究』日本学術振興会　1982.2
日野　尚志　「西海道の国府・豊前国府」『大宰府古文化論叢』上　吉川弘文館　1983.12
米倉　二郎　「国の昇格と国府の変容」『史林』66－1　史学研究会　1983.1
豊津町誌編纂委員会　『豊津町誌』豊津町　1985.3

なお、陶磁器の分類は横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』1978　によった。

宮ノ下地区

	口　径	器　高	底径･高台径	ヘ　ラ	糸
1	8.9	1.4	6.1		○
2	9.0	1.3	7.3		○
3	9.4	1.6	7.2		○
4	9.5	1.3	7.5		○
5	9.6	1.4	7.6		○
6	9.6	1.3	7.5		○
7	9.9	1.2	6.0		○
8	10.1	1.9	6.6		○
9	10.4	1.3	7.5		○
10	13.5	3.7	11.0		○
11	15.1	3.7	10.7		○
12	15.6	3.6	11.2		○
13	15.7	3.5	11.8		○
14	16.0	3.3	11.4		○
15	16.2	3.5	10.7		○
16	17.0	3.7	11.5		○
19	9.2	1.5	6.4		○
20	9.3	1.1	7.1		○
21	9.5	1.2	7.0		○
22	9.6	1.2	7.0		○
23	9.7	1.2	7.5		○
24	9.8	1.2	7.7		○
25	10.0	1.2	8.0		○
26	10.0	1.1	7.2		○
27	10.2	1.2	7.3		○
28	10.8	2.5	7.4		○
29	15.0	3.7	9.3		○
30	14.4	4.5	5.9		○
31	15.2	3.6	9.1		○
32	15.4	3.4	10.0		○
33	15.8	3.7	10.2		○
34	16.0	3.7	11.0		○

幸木（西区）

	口　径	器　高	底径･高台径	ヘ　ラ	糸
1	8.6	2.0	4.5		○
2	9.2	1.0	6.6		○
3	9.6	1.2	7.0		○
4	11.9	3.8	6.6	○	
5	15.8	3.6	6.6		○
6	14.6	4.5	4.5		
7	9.2	1.1	6.0		○
8	9.6	1.0	7.8		○
9	9.6	1.2	6.8		○
10	12.6	3.5	8.0	○	
11	14.9	3.8	9.2		○
12	15.0	6.3	8.2		
13	15.0	6.0	6.6		
14	15.6	5.5	6.2		
15	17.2	5.8	7.8		
16	15.3	5.4	6.4		
17	16.9				
18	10.8	1.7	7.7	○	

幸木（東区）

	口　径	器　高	底径･高台径	ヘ　ラ	糸
1	8.2	1.1	6.1		○
2	8.4	1.3	5.9		○
3	9.0	1.1			○
4	8.0	1.2	5.3		○
5	8.4	1.2	6.6		○
6	8.8	1.2	6.0		○
7	9.5	1.8	6.8		○
8	14.0	3.4	7.3		○
9	15.4	3.2	7.2		○
10	16.0	5.0	6.7		
11	16.3	6.1	6.2		

図　　版

馬場地区遠景（北から）

馬場地区土壇状高まりの土層断面

馬場地区Ａトレンチ全景（東から）

馬場地区溝ＳＤ065（東から）

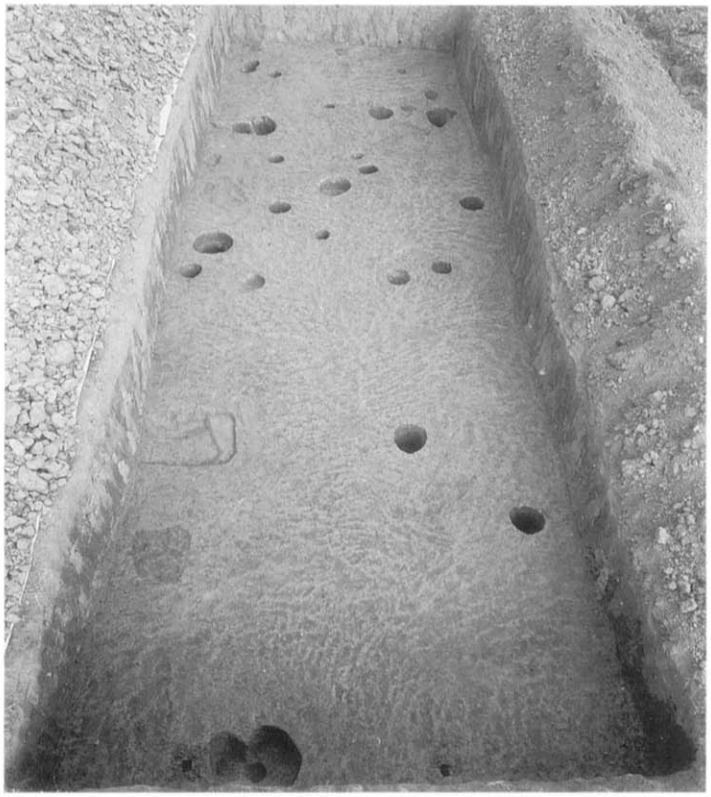
ロヶ坪地区Ｂトレンチ全景（南から）

ロヶ坪地区Ｂトレンチ北半部（南から）

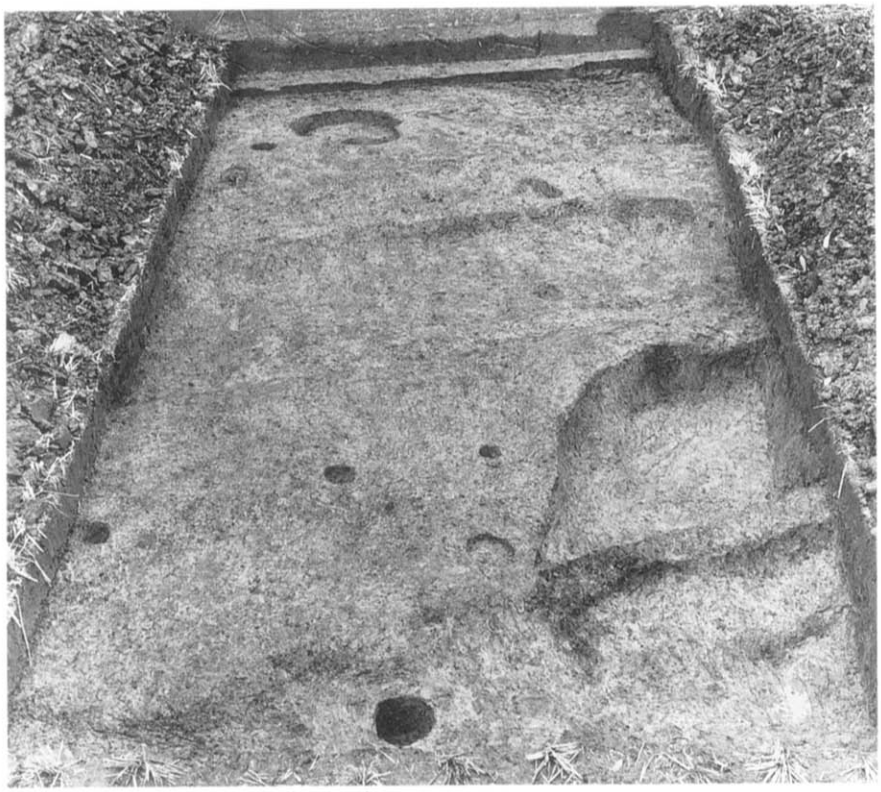
中小路地区Ｃトレンチ全景（西から）

中小路地区Ｇトレンチ全景（東から）

宮ノ下地区遠景（東から）



宮ノ下地区Ｄトレンチ全景（南から）



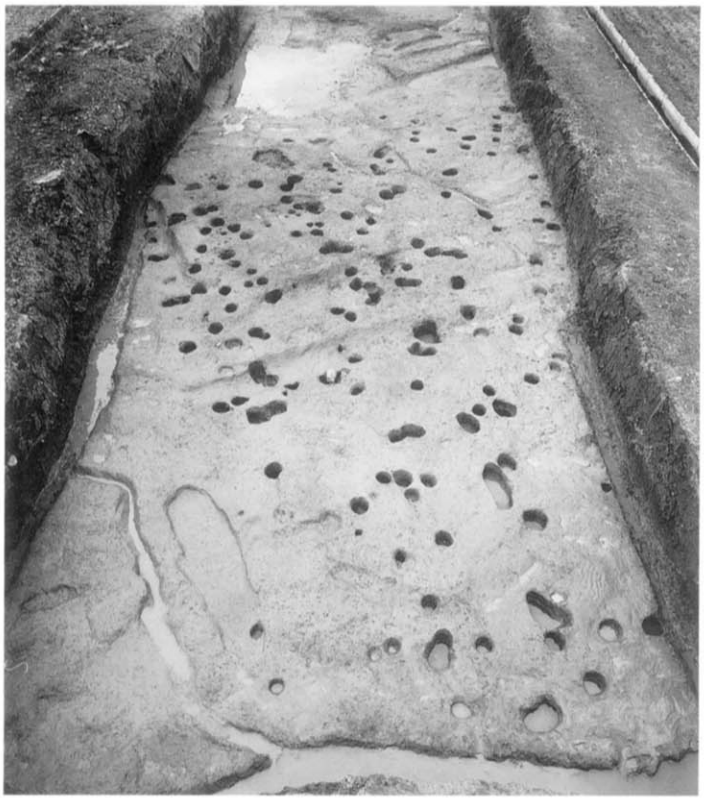
宮ノ下地区Ｆトレンチ全景（東から）

古門地区Ｅトレンチ全景（西から）

県道椎田・勝山線関係（幸木地区）航空写真

県道椎田・勝山線関係発掘区全景（西から）

県道椎田・勝山線関係西区全景（東から）

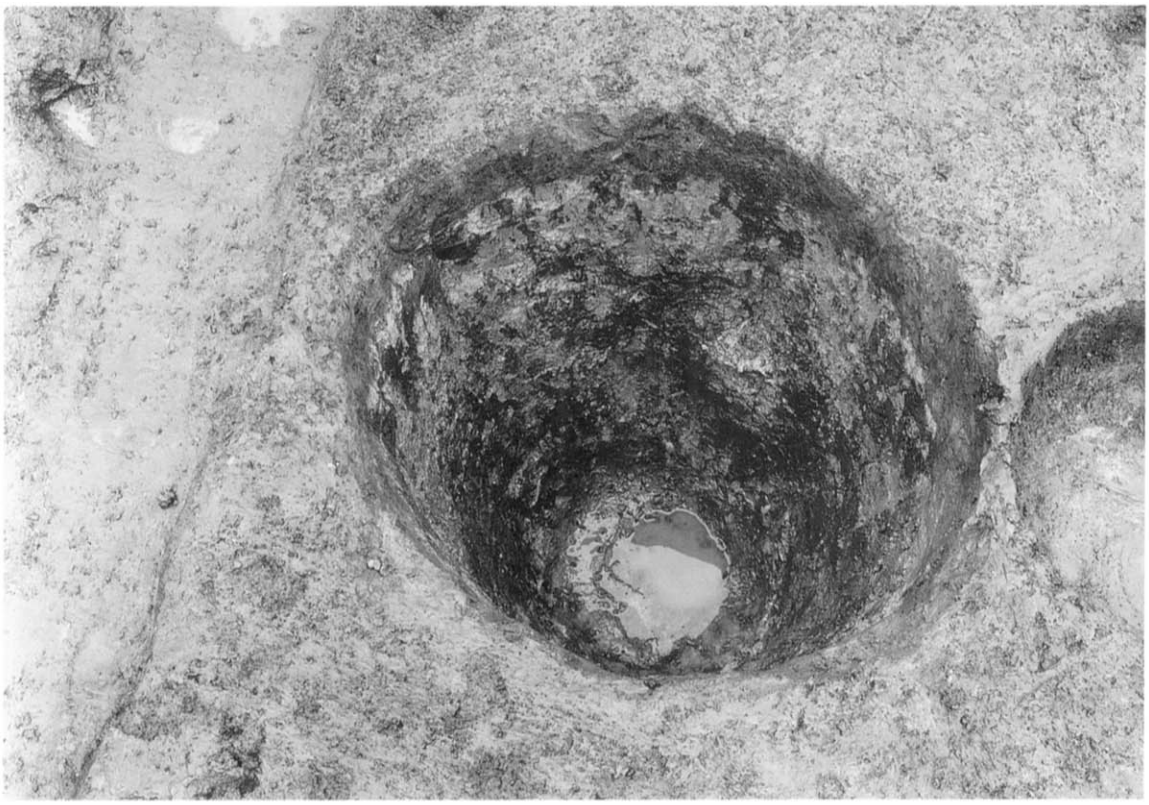


県道椎田・勝山線関係東区全景（西から）

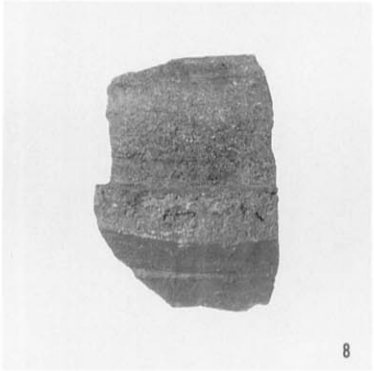
県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ100（東から）

県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ100（東から）

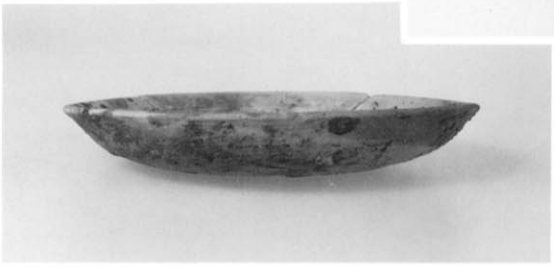
県道椎田・勝山線関係井戸ＳＥ106（北から）

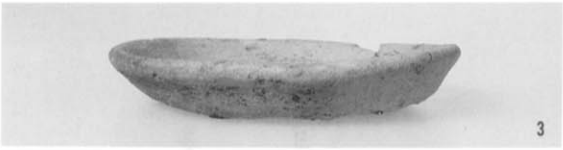


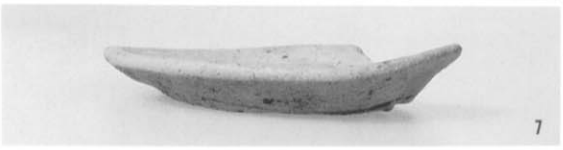
県道椎田・勝山線関係井戸105（南から）

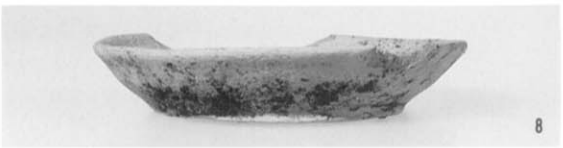


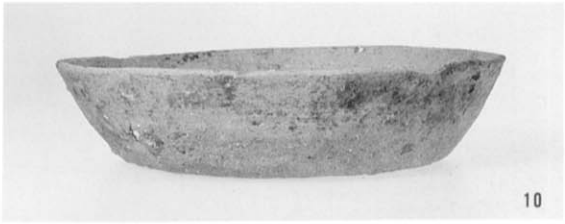
馬場・中小路・ロヶ坪・古門地区出土土器・陶磁器・瓦・木製品

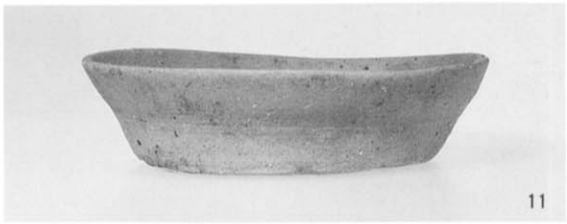


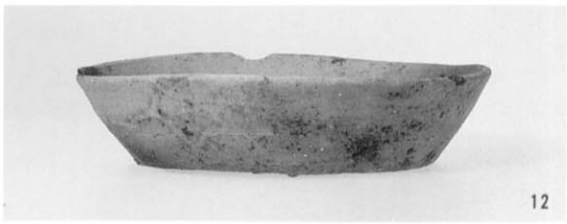


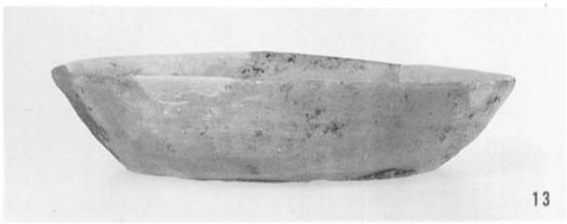




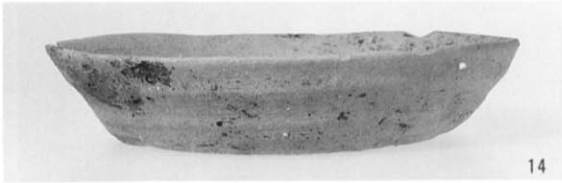








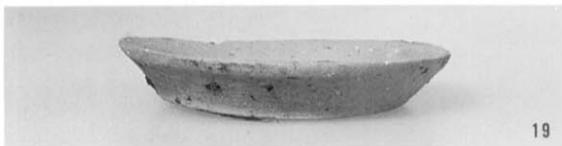
宮ノ下線関係、県道椎田・勝山線関係西・東区出土土器・土製品


14

15

16

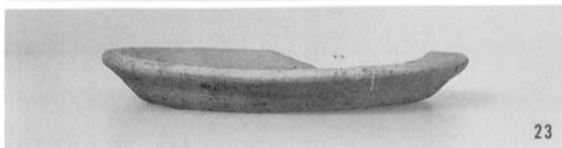
17


19

20

21

22


23

24

25

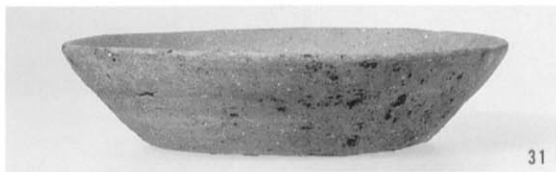
26

27

28

29

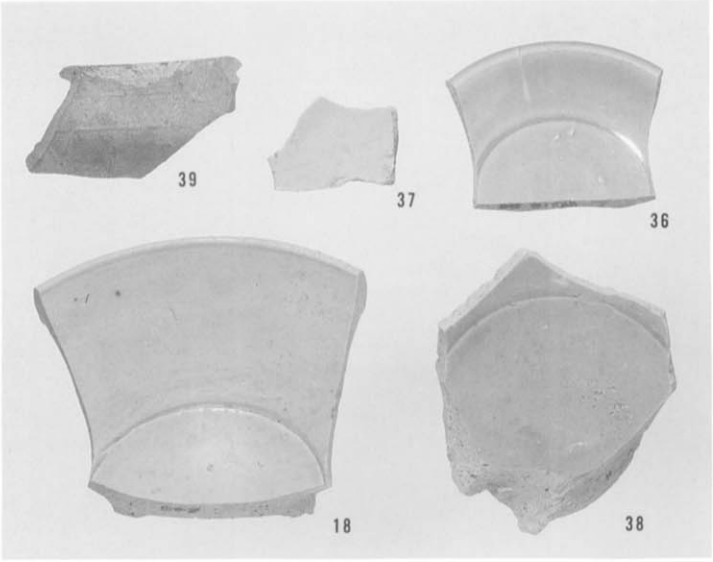
30

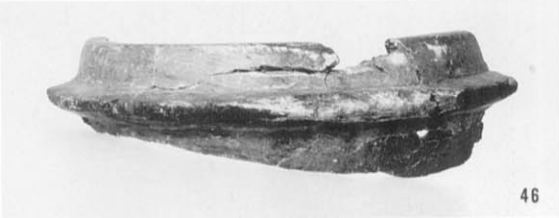

31

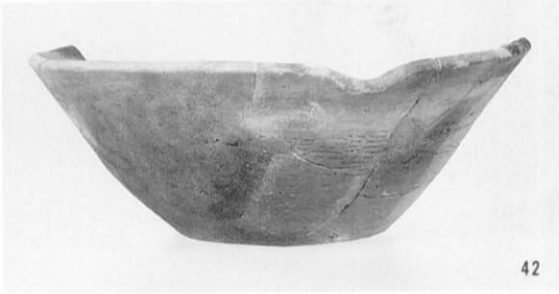
32

34

宮ノ下線関係出土土器・陶磁器







宮ノ下線関係出土土器・陶磁器・石製品

1

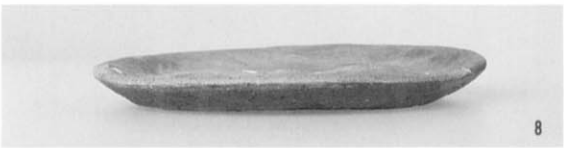
3

4

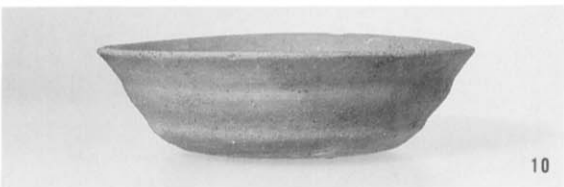
5

6

7


8

9


10

11

12

13

14

15

16

県道椎田・勝山線関係西区出土土器

1

2

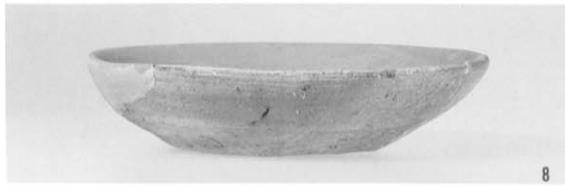
3

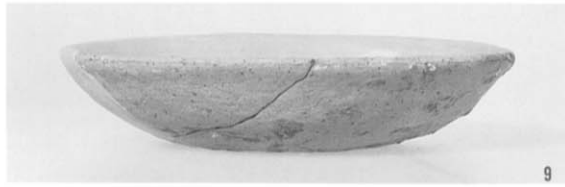
4

5

6

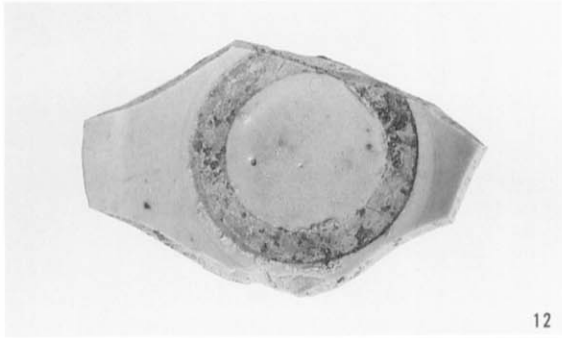
7


8


9

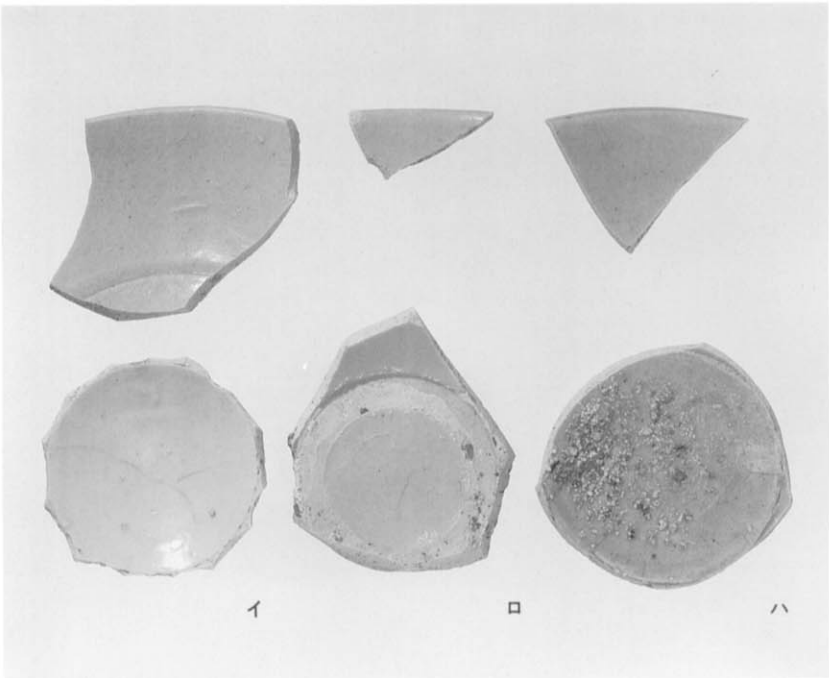
10

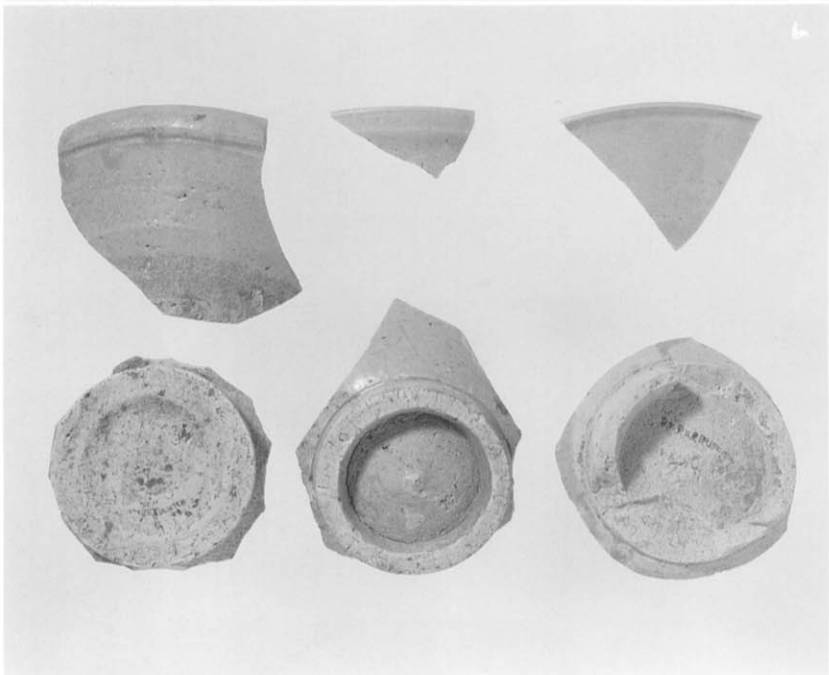
11


12

13

県道椎田・勝山線関係東区出土土器・陶磁器





古門地区、県道椎田・勝山線関係出土陶磁器

豊　前　国　府

豊津町文化財調査報告書

1987年（昭和62年）3月31日

発　行　豊津町教育委員会
福岡県京都郡豊津町豊津

印　刷　日本商工株式会社 印刷部
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31
電話 092（641）8300